

いままでの報連相と真・報連相のちがい

いままでの報連相では、報連相といえば、もっぱら上の人が下の者に求めています。報連相の大切さには上も下もありません。みんなが、報連相される立場であり、同時にする立場です。重要情報は下も持っていますが、上も持っています。上が持っている情報の共有化、すなわち「上から下への連絡」は重要です。自社の最重要情報を、「私も知りませんでした」と社長さんが言って、自主廃業した大企業がありました。前社長と前会長が巨額の損失を知っていたというのです。

いままでの報連相は、初級社員レベルの報連相のやり方を中心に考えていました。管理監督者や幹部社員レベルの報連相は視野に入っていなかったように思います。しかし、たとえば、部門間のセクショナリズムの打破と尝试してみても、組織の下の方よりも、担当役員相互間の、或いは各部門長間の、連絡の悪さとか心を開いた相談の欠如などに、原因がある場合もあるでしょう。上位者の報連相が重要です。

ビジネスの世界だけでなく、世の中の動きを観察していると、「報連相が、あたかもパソコンにおけるOS」のようなものであることが見えてきました。例えば、Windowsのようなものです。

よいOSの上でこそ、アプリケーションソフトはより効果的に動きます。アプリケーションソフトとは、例えば、QCサークル活動、CS(顧客満足)、ISOの認証取得、営業活動、会議、各種研修プログラム、…などであり、日常生活・業務活動万般です。

社会生活、職業生活での諸活動は、よい報連相の上で、より効果的になります。社内外を超え、専門・性格・年齢・性別・国籍・人種…を超えたネットワークで、自立人間同士、自立会社同士が、互惠の関係を築いていこうというのが世の趨勢です。報連相の質が、その互惠関係の成否と質を左右すると言えるのではないのでしょうか。

「安心と信頼は報連相の上に成り立つ」。「報連相は社会のOSなり」。この意味づけも、いままでの報連相と真・報連相との違いです。